



Vol. 114

CONTENTS

【コラム】ハイフレックス授業…渡辺 博芳

【解説】第13回全国高等学校情報教育研究会全国大会（オンライン大会）…小原 格



COLUMN

ハイフレックス授業



コロナ禍の影響で2020年度はほとんどの大学でオンライン授業が行われた。オンライン会議システムを活用した同期型の授業、講義ビデオや資料を配信する形の非同期型の授業など、オンライン授業の実施形態はさまざまであった。そのような中で「ハイフレックス授業」が注目されている。

ハイフレックス授業は、各回の授業に対面で教室に参加するか、同期型オンラインで参加するか、または非同期型オンラインで参加するかを学生が選択できる授業である。オンラインと対面のハイブリッドで、授業への参加形態がフレキシブルなことから、ハイフレックスと呼ばれている。単に利便性の向上と言うだけでなく、各回の授業にどのモードで参加するのが自分の学びにとってベストかを、学生が主体的に判断して授業に参加するという側面もあるようだ。

帝京大学宇都宮キャンパスでは、4月からオンライン授業を開講し、緊急事態解除後の6月からは一部で対面授業も開始した。そこで、このタイミングで、私が担当していた情報リテラシーの授業ではオンラインに加えて教室への出席も認めることとした。この授業は教材の掲載や小テスト、課題提出などで従来からLMS（学習管理システム）を活用していたので、LMSのオンライン会議機能を使うことで同期型のオンライン授業を比較的容易に実施できた。オンライン授業では、学生側のネットワーク環境も考慮して、授業中の説明はすべて収録して後から視聴できるようにし、LMSの掲示板やメールで質疑応答も受け付けていたので、非同期型での学習も可能であった。6月からはそこに対面参加の選択肢も加わり、ハイフレックス授業となった。

この授業は92名の履修者に対して教員2名が担当し、教室へは10名～18名程度が参加した。学生にも好評で、アンケートに「対面授業とオンライン授業とが選択できる点、いずれにしても授業の質に差異がなかった点がとてもよかった」と記述した学生もいた。また、「今日は提出した課題へのコメントを直接聞きたいので教室に来た」と主体的に参加形態を選んでいると思われる学生も見受けられた。

学生にとって参加形態がフレキシブルなハイフレックス授業であるが、教員が授業日に出張などで都合が悪くなった場合に、「今週は非同期型だけになります」などとして、教員にとってもフレキシブルな運用ができると、教員も学生もHappyになれそうだ。ハイフレックス授業はコロナ禍の「正の遺産」となるのではないだろうか。



渡辺博芳（帝京大学）（正会員） hiro@ics.teikyo-u.ac.jp

1988年宇都宮大学大学院工学研究科修士課程修了。栃木県庁を経て1991年帝京大学理工学部・助手、現在、同教授、同大学ラーニングテクノロジー開発室・室長、博士（工学）。教育工学・情報教育に関する研究に従事。

LOGOTYPE DESIGN...Megumi Nakata, ILLUSTRATION&PAGE LAYOUT DESIGN...Miyu Kuno